

四季折々の 森の植物や鳥・虫などの動物を紹介します

ヤマブキ(バラ科)

「出会いのゾーン」、「ふれあいゾーン」で観察できます。

ヤマブキは日本の山野に広く分布する落葉低木です。高さ1~2mの株立ちになります。花期は4月から5月で、長く垂れる枝からでた短い側枝の先端に、鮮やかな黄色で直径3~5cmの花が1個ずつつきます。

濃い緑の葉が黄色の花をいっそう引き立てています。「七重八重 花は咲けども 山吹の 実のひとつだに なきぞ悲しき」の歌に詠まれた「実の」と「蓑(雨具)」をかけた太田道灌の故事に出てくる八重咲きのヤマブキは園芸品種で実をつけません。

ヤマブキの名前の由来は、枝が細く風に吹かれてゆれる様子が「山振り」となり転じたとか、山春黄の転化などの諸説があります。庭、生け垣、公園などによく植えられています。



ヤブツバキ(ツバキ科)

主に「ふれあいゾーン」で観察できます。

公園のあちらこちらにヤブツバキが咲いています。ヤブツバキは日本の野生のツバキで、太平洋側の暖地に多く見られます。

一方、日本海側の多雪地帯にはユキツバキが多いと言われています。花びらがばらばらにならないで、林床に花の姿そのままに散る赤いツバキの花にも冬から春先へと移り変わる季節の風情があります。

名前のおり、あまり日光の当たらない藪の茂みのなかにひっそりと咲くヤブツバキは花の色や葉の色も鮮やかですが、この公園のヤブツバキは日当たりのよい場所に植えられたものも多く、花も葉も日焼けして少し可哀相な気もします。

花には甘い蜜があるのでこれを吸いにメジロやヒヨドリがきます。

名前由来は葉が厚く艶々して美しいことから「厚葉木」のAが省略されたという説や「艶葉の木」が転化した説などがあります。強い刈り込みにも耐えるので、生け垣、家庭の庭そして公園などによく植えられます。



タンポポ(キク科)

公園内の林床、草地、園路沿いで観察できます



季節は春。新緑の林床、空き地や園路沿いに暖かな陽光を集めて一面にタンポポが咲いています。しかし、園内に咲き乱れるタンポポのほとんどが外来種のセイヨウタンポポです。日本の在来種であるカンサイタンポポの総苞片(花のつけねにある総苞の1枚1枚)は重なり合っていますが、ヨーロッパからやってきたセイヨウタンポポは総苞片が下向きに反り返っています。

セイヨウタンポポは在来のタンポポと比べて次のような特徴をもっています。

- * 春だけではなく、1年中花が咲き、多数のタネをつける。
- * タネは在来種に比べて小さく、遠くまで飛ぶ。
- * タネの発芽温度域は広く、冬でも発芽できる。
- * 染色体が3倍体で、単為生殖(雌と雄が関係することなく単独で子をなすこと)でタネをつくる。したがって、子は親と完全に同一な遺伝子をもっていてクローンと呼ばれる。

在来のタンポポは、夏になると葉を自ら枯らして夏眠する性質があります。この性質は夏に陰になるような自然度の高い草地では葉の呼吸による無駄なエネルギー消費をおさえることになりタンポポの生存にとって有利です。冬から春にかけて十分な光さえ得られれば夏は自分よりも高い背丈の植物の陰でも生きていけるのです。

夏眠しないセイヨウタンポポは草丈の高い植物の下では、太陽光が当たらないので逆に弱ってしまいます。

さて、長い期間で考えたときどちらの生き方が有利なのでしょう？

アセビ(ツツジ科)	「ふれあいゾーン」で観察できます。
<p>春に、枝先に多数の白色、または桃色のつり鐘形の小さな花を鈴なりに咲かせます。花期は3月～5月です。アセビにはアセボトキシンという毒があり、これを食べた馬が酔ったようになることから漢字名で馬酔木という名前がついています。山地や公園ではシカ等がこの木を食べないので、アセビだけが群生しているところもあります。多数の園芸品種があり、盆栽や庭木、公園などに用いられます。</p>	
ユキヤナギ(バラ科)	「であいのゾーン」、「ふれあいゾーン」で観察できます。
<p>枝がヤナギのようにしだれ、雪が積もったように白い花が咲くのが名の由来です。高さ1～2mの株立になります。若枝はしなやかですが古くなると固くなり、四方に枝を伸ばすので手入れが必要です。花期は4月ごろで、花は直径1cm弱の白色です。2～7個ずつまとまって花房をつくり枝全体を覆うように多数つきます。</p>	
レンギョウ(モクセイ科)	「であいのゾーン」、「ふれあいゾーン」で観察できます。
<p>花は直径約2.5cmの鮮やかな黄色の花で内側はやや橙色を帯びます。花期は3月～4月です。花は葉がでる前に、前年枝の葉の脇につきまします。花卉(花びら)は4枚のように見えますが、実際は筒状の花が深く4つにさけた形です。中国原産の落葉低木で日本に渡来した時期はかなり古いようではっきりしません。高さ2～3mになり枝が四方にでるので手入れが必要です。桜に咲き始め、桜が散ったあとも長いこと春を黄色く彩ってくれるので、庭や公園に植えられ生け垣にもされます。</p>	
ヒメオドリコソウ(シソ科)	「里の森ゾーン」にある2本の大きなエノキの南西側の林床付近で観察できます。
	<p>ヒメオドリコソウが群生しています。ヨーロッパ原産で明治年間の中期に東京で見いだされた越年生草本です。花は長さ約1cmの唇形でやや薄い紅紫色です。花が咲く時期になると、上部の葉は紅紫色になります。茎は下部で分岐して立ち上がり、四角柱です(シソ科の特徴)。ヒメオドリコソウの小さい花をじっと見ていると、頭に布をかぶった踊り子の姿が浮かんでくるそうですがどうでしょうか。</p>
シャガ(アヤメ科)	「ふれあいゾーン」の園路脇で観察できます。
	<p>森の縁に蝶が舞うようにシャガの花が咲いています。朝、咲いた花は夕方にはしぼみますが、ひとつの花茎に次々と花をつけます。シャガは「3倍体」のため種子はできませんが、根茎や地中にはランナー(匍匐枝)を伸ばして増えつづけるたくましい植物で、半日陰でもよく育ちます。また、シャガは立ち姿が美しいので生け花の材料としてよく用いられてきました。庭、竹藪、寺や神社でよく見かけます。(注)普通の生物は父方と母方から1セットの染色体をもらうので2セットの染色体(2倍体)をもっています。それが3セット「3倍体」ということになると精細胞や卵細胞をつくらうとしても、減数分裂がうまくできず正常な花粉や卵細胞ができないので種子はつけれないのです。前記のセイヨウタンポポも同様です。</p>
コガモ(カモ科)	公園内の水路で観察できます。
	<p>公園内の水路にコガモがつがい、さかんに採食しているのを見かけることがあります。コガモは他のカモより小さく、雄はお腹の後部が黄色いのが特徴です。頭部は茶色で目の周辺が緑色。雌は地味な灰褐色の羽毛をもっています。冬鳥ですがなかには北の国に帰らず、湖沼や川・池に残り繁殖するものがあります。(写真の上が雄、下が雌です)琵琶湖にいた水鳥はほとんどがシベリア大陸へと飛び去りました。</p>
コサギ(サギ科)	公園内の水路で観察できます。
	<p>ニワトリより少し大きめのサギです。シラサギの仲間としては小型の鳥で、全身は白色、くちばしと足は黒く、足のゆびだけ黄色みを帯びた白色です。この足のゆびの色によってアマサギ、チュウサギ、ダイサギと区別ができます。留鳥または冬鳥で、湖沼、水田、川の水辺に現れます。水辺の浅いところを岸沿いにゆっくり歩か、じっと立って魚を狙っています。</p>